



みゆき

小松市立御幸中学校

学校だより

NO. 17

令和2年10月14日

文責：校長 河南光昭

「知る」ということ・・・

(今日は、中間テスト初日です)

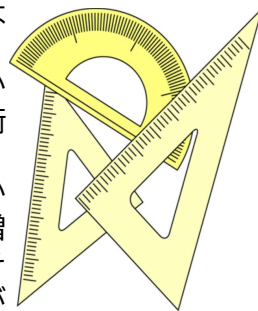
とある本から見つけたお話

小原 二郎 (日本の人間工学、住宅産業・木材工学者)

ものを知るには三つの方法がある。それは「分ける」と「つかむ」と「さとる」である。第一の「分ける」というのは、対象物を順次分解していき、その最終端末のエレメント(要素、成分)がすべてわかれば、それで全体がわかったとみなす分析的な理解のしかたである。これはヨーロッパ的な考え方で、私たちが明治以降に受けてきた教育は、すべてこれであった。分けるという字と分かるという字が同じなのもそのためであろうし、解明という字が使われているのは、分解すれば明らかになるという思想が根底にあったからである。

一方東洋では、これに対して「つかむ」という考え方をする。これは分析式とは逆の方向のもので、はじめにまずものを全体としてとらえ、必要に応じて細部をおさえていくというやり方である。日本では古くから、この総合的なつかむというとらえ方が得意で、わが国の文化も芸術も、ほとんどこれを基礎にしてできあがってきたといつてよい。

三番目の「さとる」というのは、分けるとつかむを組み合わせ、しかも一段次元の高いところから理解しようとする方法である。古来、高僧たちが修行の目標としたのはこれであった。ヨーロッパ的分析方法もその最終的なねらいがここにあるということはいうまでもないが、入口が東洋とは違うのである。



西洋と東洋では「知識」を得る手法は異なっていますが、最終目標は『知恵』を得ることで共通しています。すなわちそれは、得た知識を実生活の中で活かしてこそ意義があり、言い換えれば、世の中の人々が幸せに暮らしていけるようにしていくこと(=知恵)につなげることこそが大切なのだということでしょうね。

みなさんが、知識を得るための身近なものは「授業」と「教科書」でしょう。たしかに「教科書」は、法則や定理などのように分析的に物事を明らかにしようとしています。詳しくしようとすればするほど、そのことから細かく分けて、その一つ一つがどういふものであるのかを解明しようとしています。



一方授業では、多くの場合、先生方はこの授業で皆さんに何を理解し、何を考えてほしいのかという「ねらい」または「学習課題」を提示します。すなわち今日学ぶことは何なのかを示します。これは「つかむ」という類のものでしょう。そして次に、そのつかんだものが果たして本当にそうなのか、なぜそうなのかなどを調べたり、考えたりしていると思います。そして最後に「ふりかえり」によって、書くことを通じてそのつかんだことを確認しています。

加えて、一時間一時間の授業のみならず、数時間のくくりで「単元」というものがあります。この「単元」全体の学習を通して、皆さんにどのようなことが理解できるようになってほしいのか、どのような力を身に付けてほしいのかを示しながら学習しています。ただ、知識は忘れやすいので、「できる」や「身に付ける」にするために「定着させる」という作業が必ず必要です。どれくらい「できる」や「身に付ける」ことができたのかを確認するのが、今日のようなテストですね。

ある意味、みなさんは毎日毎日の学習の中で、自ずと「分ける」と「つかむ」を実践しているわけです。それによって得た「知識」はきっとどこかで(今すぐではなくても)役に立つ日が来ると思います。その時「知恵」に結びついて、「さとる」ことにつながるようになるのでしょう。